ずいそう

“紫式部は何でお尻を拭いたか？”

阿　部　新　治

この難題は，私にとってはクソ真面目なテーマである。今から15年程前にイギリスのワイルズという数学者が300年間以上も解けなかった「フェルマーの大定理」という難問を解いて世界の数学界を驚かせた。小生にとって表題の難問は「フェルマーの大定理」でありライフワークの1つである。

この難題の答としてはいくつか考えられる。①お尻を拭かなかった。②ワラや木のヘラなどで拭いた。③紙で拭いた。④水で洗った。⑤麻などの布で拭いた。

本論に入るまえに，そもそもウンコとは何なのか。人間のウンコは健康状態等によって左右されるが，おおむね水分70～80％，腸内細菌の死骸10～25％，食物の食べカス10～15％，その他8％であるそうだ。そして，人間は何故“尻を拭くのか？”，排便したあとで尻を拭く動物を人間以外に見たことが無い。おそらく人間が2足歩行であること，股関節の直上部に肛門があること，そして糞に塩分があり少なからず臭うため，お尻に付くと不快になることが理由であろう。

以前に登山をしたとき雉打ち（野糞）の後に紙で拭いたが，完全に拭ききれないため，便の塩分により股ずれが生じて大変な目にあったのを記憶している。

その点，鶏も犬も猿も尻を拭かない。肛門が股関節から離れていて股ずれを起こさないからであろう。

小生がトイレに興味を持ったのは，今から20年以上も昔のことである。東京駅近くのブックセンターで何気なく手にした本に表題の小見出しがあった。確か「人糞地理学」教授の異名を持つ慶應義塾大学名誉教授の西岡秀雄氏が著した本ではなかったかと記憶している。西岡教授は仙台生まれでトイレ協会名誉会長でこの道の重鎮である。

本題に入ろう。まず，股ずれの理由から考えると，答えとして①は可能性が低いと思われる。もしこのテーマが「紫式部」でなく「吉永小百合」であれば答えは③と簡単だ。また庶民であれば②であったろう。しかし，紫式部となると話が複雑になる。紫式部は生没年が不明だが，西暦1000年前後に生きていた人間であることは源氏物語や紫式部日記などから推察されている。

一方，日本で庶民が紙をトイレットペーパーとして使用しはじめたのは江戸時代頃からで，それも都会を中心に使用されたにとどまり，地方の庶民は「ワラ」，「葉っぱ」，“ちゅうぎ”などと呼ばれる「木片」を使用していたらしい。それほど紙は貴重品であったと思われる。

紙はもともと中国で発明された。粗雑な紙は紀元前にも製造されていたが，文字が書けるような滑らかな紙は紀元105年に蔡倫（さいりん）が発明したとされている。そして，紙の製造法が日本に伝わったのは紀元610年で，高句麗の僧の曇徴（どんちょう）が伝えたと日本書紀に記されている。しかし，製造法が伝わる前に紙自体は日本に輸入されていたと見られる。

12世紀の平安時代に源師時（もろとき）の日記である「長秋記」には大壷紙（今のトイレットペーパー）のことや樋殿（室内トイレ），樋箱（おまる）のことが記されている。また同じ時代の絵巻「餓鬼草子」には道端で用便の後に使われたと見られる紙片や木片が捨てられている。このことから12世紀の宮中や上流階級では尻拭きに紙を使用していたことが判っている。

インターネットで表題を検索すると，紫式部は用を足した後に本人又は召使が手で拭き，召使が用意した手洗桶の水で手を洗ったということになっている。また，下痢をしている場合は綿や麻などの布で拭いて始末し，貴重な布は再利用したとなっている。

しかし，十二単（じゅうにひとえ）を着た紫式部が自分でウンコを拭くのは困難であると思われる。だからと言って召使が手で拭くのもウサン臭い。

これらのことから，糞尿法に基づいて総合評価すると“紫式部は用を足した後に侍女が木ベラで後始末をしていた”という技術提案の評価値が最も高いと考えている。

小生もこれまで機会を見つけて色々と調査をしてきたが“糞闘努力の甲斐も無く”今だに落札技術を特定していない。

――あべ　しんじ　㈱イスミック　東北支店　技師長――